

巻頭インタビュー

宮澤保夫会長に聞く

今こそ原点に戻り、ダイナミックに前に進むとき。

星槎大学紀要『共生科学研究』No.16では、新型コロナウイルス感染拡大という予測外の出来事に教育機関としてさまざまな対応をした2020年度を振り返る特集を企画しました。このコロナ禍は長期に及んでおり、星槎大学本来のあり方や今後の展望につなげることが迫られています。2021年年初頭の挨拶のなかで星槎創設者の宮澤保夫会長は、「何が問題の本質なのか考える力が必要だ」「星槎の未来を考え、星槎の底力を示したい」などを話されました。この禍を好機に変えるため、宮澤会長に星槎大学創立の原点、ふり返り、進むべき方向性などについてお聞きしました。

(聞き手 保屋野初子・大学紀要編集委員会委員長)

コロナ禍の一年、もっとやれることがあったのではないか

——1年以上続くコロナ禍で宮澤会長ご自身はどんなことを考えておられましたか。

僕たち自身の生活への影響はもちろん、政治とも向き合わなくてはならなかったことが最大でしょう。政治家の判断力、決断力とともに準備がまったくできていなかったこと、とくに感染症対策予算を大幅に削ってきた一方で自分たちのための予算使いが露見しました。だから、対応が後手後手に回ってしまっています。国民の命を守るという政治の本質が問われる時に自分たちの利害を追求している姿勢が顕著に表れたので、国がどこを見て政治をやっているか国民は真剣に考えないといけない事態となりました。しかし、そのことが可視化されて、国民はそれに気づき考えるチャンスを与えられたことは良いことだと思いますよ。これは星槎にも言えることですよ。

——たしかに教育分野も大胆な対応を迫られました。

昨年2月末に小中学校の全国一斉休校要請が唐突に発出され、子どもたちにとっては望ましくない形となりました。どんな子でも学校に行きたいわけですから。休校後の対応は各教育委員会に丸投げされました。しかし各教育委員会には決定権がない、国からは明確な指示が来ない。オンライン授業をやるにしても各教育委員会が責任を持ってできない、パソコンが売り切れてしまった、通信環境が家庭によってまちまち、といったいろいろな問題が出て来たにもかかわらず放置されました。ある政治家は「みんな携帯電話を持っているでしょ」などと発言して、この人たちはいったい何を考えているんだという批判がわき起こったくらいです。

——星槎の高校、大学の対応はどのように映ったでしょうか。

オンライン対応という面では一般の学校よりはよかったと思いますが、バタバタしたことは確かです。そのなかで星槎中学校、星槎高等学校は対応が早くて、すぐにZoom授業に切

り替えた。すると、不登校や教室で喋れなかった子たちも参加してみんなとチャットができた、画面でも喋れた、あいつの声を初めて聴いたなどの声、そのことで友だちと親しくなっていた、不登校の子がむしろ学校に行きたい気持ちになったといった効果があった、などと聞いています。マイナスと思われる教育環境も捉え方ややり方一つでプラスに変えられることを表していると思います。相手に何が必要なのかを考えることが大切ですね。これは中学、高校、大学も同じですね。

——昨年4月末には「星槎学びチャンネル」も始まりました。

そうですね。学びチャンネルをさらに有効に使って引き出しを増やせる方法はあったのかもしれない。われわれが気が付いていないやり方がまだいろいろあったのではないかと。これは別の機会に言わないといけませんかね。とにかく今後、教育の受け手と与え手の間の新しい道が何本もできてくるはずですよ。コロナ禍では通信制の学生だけでなく、アルバイトを普段以上にやらなくてはならない学生も多かったのも、そういう人たちの必要に応じていくようなやり方、例えば通学とオンライン授業の併用なども含めて模索しなくてはいいですね。必要とする人たちの立場に立って、その人たちがそのとき満足できるような多様な形を提供できたかを振り返る必要があるでしょうね。

——授業や学修の内容を多様化するところまでは行かなかったかもしれません。

オンラインで教育することが重要なのではなく、その中身が、例えば政治を考えさせる、環境を考えさせる、なぜこうなったかを考えさせる、自分たちでできることも考えさせる。そういう多岐にわたる内容を授業で扱うことが少なかったなあとは感じました。コロナ禍だからこそ、見方を変える、違った立場から見る、考える、友だちや仲間との関係がどれだけ大切かがわかるような授業があればよかったと思います。30分でも40分でも意見交換をする、次の授業ではそのなかから意見を拾い上げてみんなで話し合ってみようとか、ね。学修の多様性と継続性をつくることはとても重要なことです。

大学・大学院の授業について言えば、単位を取らせるためだけの授業だと大学側のアリバイづくり、作業であって、本来の仕事ではないのではないのでしょうか。単位を与えることは大学の役割ではあるのですが、コロナ禍の今しかできないこともあるはずで、それを入れ込んでいくことが必要だったのではないかと思うんです。正直に言うと、そこまで考えが至っていなかったように僕には見えました。Zoomを使ってそれまでの授業ではできないことをやって学生に気づいてもらう、教員自身も気がつく。ツーウェイのはずなんです。教育の原理原則は、「動機付けと発見」。押し付ける授業ではなく考える授業、つまり問題提起のような授業展開が望まれます。学位のための授業だけではなく、何のために学ぶのか、それは生きるために考える、ということではないのでしょうか。

——ワンウェイになっていたのではないかと？

政府のコロナ対策が、「命を大切に」と言いながら本質でないことをやってきたのは、言ってみればアリバイづくりだったからではないですか。大学の教育でも同じわけですよ。単位のための授業のなかでも、この手段を使ってこういうことができるな、10分、20分でもこれを入れてみよう、といった工夫はとても重要なことです。オンライン授業をやること

が目的になってしまって、そこまで考えが届かなかったのではないかな、ということです。

25年以上前に衛星を使った授業を構想した

—宮澤会長はITを使った教育を20年以上前に考えたと聞きました。当時、どのような手段で、どんなことをやろうと考えたのですか。

25年以上前です。まだ音声だけの携帯電話が出始めたとき、「将来これで授業ができる」と思っている準備をしたんです。当時の理想は、最低でもロケット6基の静止衛星を打ち上げて24時間、地球上のどこからでも通信できるようにすることだったのですが、6基でも時間を区切れればできる。そうすれば世界中に学校ができると思ったんですよ。それで、親交があったアラスカ大学が120キロ上空まで届くロケット発射台を8基持っていたので共同でできないかと考えて、当時アラスカ大学フェアバンクス校国際北極研究センター所長でオーロラ研究の第一人者だった赤祖父俊一先生を知人から紹介してもらいました。そして僕の考えを伝えたら、「それは面白い考え方だね」と賛同してくれました。ただし、独自にロケットを打ち上げるにはお金がかかる。すでに周回している衛星の電波を2、3時間単位で買うと1時間あたり2、3億円だと言うんです。それは無理だからどうすればいいかと尋ねたら、「冷戦が終わったので、大学のロケット発射用ブースターを無料で使うことはできる。うちの学生が100キロくらいまでならロケットを打ち上げることはできますよ」と。ならば1基を使用するだけでも、アラスカ大学の学生がロケットを造って宮澤学園の生徒が来て一緒に打ち上げができるんじゃないか、と考えたんです。

—衛星を打ち上げてどんなことをしようと考えたのですか。

最初はピーターバン幼稚園の子どもたちが歌っている歌と、宮澤学園の校歌を宇宙から流してそれをみんなで聴こう、衛星が上空にいる5分、10数分なら聴けるはずだ。そういうことを考えたんです。2、3千万円あればできるはずだったけど、生徒たちの旅費などを含めるとお金が足りなかった。その後、アラスカ大学と東海大学、富山県立大学が日米共同観測ロケット打上実験（2000年～2009年）をやって、日本の大学生のロケット実験につながっていったんです。

—いまZoomでできるようになったことをその時期にすでに考えていたわけですね。現在、ミネルバ大学大学院では地球上のどこからでもオンライン授業が受けられるそうです。

時期が早すぎて体力も足りなくてできなかったけれども、生徒たちが向うへ行くと一緒にロケットを造って打ち上げて、10分でも校歌が流れて「わーっ」と感動することをやりたかった。それをもとにして次の展開に結び付けたかった。夢を具現化するために何をするか、それが僕にはとても重要で、僕の夢だけど子どもたちの夢でもあるわけですよ。

大学を創った原点を忘れないでほしい

—幼稚園、塾、高校と、インクルーシブな教育に踏み出して成功した後に大学も創ろうと考えたのはなぜですか。

不登校の子どもたちや発達障がいの子供たちには、彼らを理解して伝えることができる

教師や大人がいる社会をつくってあげることが必要です。その「環境づくり」をやろうというのが星槎大学を創った理由です。それは、星槎が幼稚園から高校までで実践してきた「インクルーシブ」を大学で伝えていく、実践するもの。さかのぼってなぜインクルーシブをやろうとしたかと言えば、憲法26条と教育基本法第1条で謳われている教育を受ける権利が実践されていない、行政の責任が果たされていなかったからです。高校を始めようとした当時、教育界の責任者たちは発達障がいとか不登校の子たちを「怠け者なのだから優遇する必要はないでしょう」と言っていました。だから星槎は、公的な教育機関の補助機関としてそういう子たちを「支える役目」を果たそうとしたわけです。真っ向勝負はできなくても一石を投じることはできる、それが星槎のスタートです。やっていくうちに、そういう子たちを理解して一緒に生きようという社会でなければ、彼らを救うことはできないとわかってきました。理解者になる大人、とりわけ教育に携わることができる人を育成する大学が必要だと考えたのです。

——それで「共生」が大学のテーマになったということですね。

子どもたち、教師、大人たちが「一緒に生きるんだ」という考えから、40年近く前に、この言葉がほとんど使われていない時から「共生」という言葉を使ってインクルーシブを表現してきました。僕は、星槎の仕事は教育を通じた社会改革だと思ってやってきました。書いたり表現したりすることは誰でもできますが、大事なことは実践することです。星槎大学は他大学と比べればいい線いっているとは思いますが、そもそも星槎がどう創られて何をやってきたか、大学の先生たちに十分に伝わっていないのではないかと思います。初代学長の山口薫先生、副学長の川野辺敏先生などと一緒に「何とかしなきゃ」と、何も無いところから試行錯誤や闘いを重ねて実行することで大学ができた。社会に必要とされる学びの場としてありたいと考えたわけです。でも、その思想を強く意識し続けないとどんどん「普通の大学」になってしまうのですよ。

——もう少し具体的にお話いただけますか。

大学はただ知識を教えるところではなくて本質を伝える、そして考える、そのために理論と実践が必要です。一般の人が持っていない知識を学生や一般の人に伝えることはとても重要なことで、それを教え込むのではなくて伝える、学ばせる、ものごとの見方を変えさせる、見る角度を変えさせる。そのための伝え方を工夫して実践することが大学の仕事だと思います。そのためにそれぞれの先生たちがやっていることをお互いに認めて意見を交換して良いものを作っていき、という形にしてほしいわけです。昔よく言われました。「君の考えは甘い、教育はそんなものではない」と。本当にそうなんですか？ 私の考える教育は間違っていると思う方々が多いことは知っていますが（笑）。

——星槎の3つの約束、「人を認める」「人を排除しない」「仲間を作る」をまずはお互いにやりなさい、ということですか。

まずは人を認めること。僕は、自分の立場をつくるのではなく相手側の立場をつくらうとして生きてきた、自己犠牲ということではなくてね。何が必要か、何のために、誰のためにやっ

ているのが一番重要なことです。それが社会改革になればいい。今の星槎大学は社会改革になっているか、自分たちのテリトリーとか自分の立場を守るためになってはいないか。紀要はそれを検証する場でないといけない。本当にそうになっているのか、実際にやっているのか、やってみようと努力しているのか、大学としての実践とは何だろう、ということを検証する、反省する、直しを加えていくことは、前に進むために必要なのです。

——紀要の役割について、私は正直言ってそこまで考えが及んでいませんでした。

星槎の成り立ちをふり返る意味はそこにあるんです。大学は、不登校や発達障がいの子たちを理解する社会をつくるために創られたことを理解してほしい。教える側からの教育ではなくて、受け手、子どもや学生の側に立った教育を実践する。それを僕は「社会的な必要性」と呼んでいるわけです。大学・大学院の先生たちには、自分が持っている専門知識という財産を生かすために、高校生、小中学生、幼稚園児に対しても同じ「伝える心」をもって、相手によって表現の仕方を変えながら伝えてほしい。ハンディのある子どもたちを理解できる大人を育てるために。それが星槎の役目ですから。働く学生に対してもそうです。「相手を認める」というのは、その人が置かれている環境を認めること。働きながら学ぶことは非常に重要なことですから、その学生の側に立って公平に対応することが必要で、教える側の都合しか考えないというのでは困るわけです。その人の仕事、家庭、経済といった環境をまずは理解しよう。星槎大学を無入試制、無学年制にした理由は、生涯学習という意味もあるけれど、必ずしも恵まれていない人たちにも学べる機会を開くという星槎の理念からなのです。今回のコロナ禍では、そのことがいっそう問われたのではないのでしょうか。

教育の原点「発見と動機付け」は幼稚園から大学院まで同じ

——「共生」を教育の場に持って来たときに「インクルーシブ」となったということでしょうか。具体的にはどのように実施していったのですか。

最初は幼児教育だったので、そこでインクルーシブをやってみようということで、障がいのある子どもを普通より多い割合で入園させました。すると子どもたちはいじめめるのでなく助け合うようになった。ひとつ結果が出て面白いことだなと思いました。塾（ツルセミ）では不登校の子、発達障がいの子、勉強が好きで理解が早い子も混じっているんですが、そういう子がそうでない子をととてもよく教え始めるわけです。それも面白いなと思いました。

星槎の高校は普通学校でありながらインクルーシブを採り入れている初めての学校だったので、いろいろな学校を何十カ所も見学してよい点を採り入れたり、他ではやってない伝え方をやってみたりして、実践を懸命に繰り返したんです。トッぽい暴力的な子たちが弱い子たちといっしょになるとどうなるかを見守っていると、彼らはむしろ弱い子たちを守る側に回ったんです。学校の外でいじめられていると聞けばすっ飛んで行って助ける。すごい変わりようでした。「俺たちの仲間だから」と。僕は、「仲間をつくる」を実践してくれたことがうれしかったし、人のやさしさを教えられました。そうやって一つひとつ、子どもたちにどう関わるかを考えながらやってきました。それを「実践」と言っているわけです。

—そのような「実践」は、専門教育ではどのように考えてどう行うのがいいのでしょうか。

僕は、人間を育成するにおいて一番大事なのは幼児教育だと思っています。保育園の先生や幼稚園の先生は毎日毎日大変なことをして、そこでは相手によって差別や区別はないというか通じないわけです。つねに相手に新しい発見をさせたい、動機付けを与えたいという教育の原点は、幼児でも小学生でも中高校生でも変わらない。大学、大学院だって同じです。「発見と動機付け」、それを忘れてはいけません。それにはホンモノの教材が必要です。たとえば仏像修理をしている博物館に行って1300年前に造られた仏像の木にさわってみるだけで、モノの見方、価値観が変わるでしょ。ホンモノを見せる、さわらせる、考えさせる。これが授業だと思っています。相手によって表現の仕方と伝え方が変わるだけです。

そういう意味での新しい大学・大学院を創りたかった。大学という形より本質をやる場所がほしいのです。それまでに星槎がやってきたことは専門家が言う専門とは言えないかもしれないけれど、専門家の人たちがそこから学ぶことも多いと思っています。まあ、専門家になるための入り口であればうれしい。僕は行動分析学会の会員になっていて学会誌だけは見ているんですが、「石は考えるか？」なんていう面白い論文もあって、本物の研究者はすごいなと感心する。けれど、僕たちがそこまで追求したら子どもの面倒をみられなくなってしまふ。だから中学高校の先生たちには、「発達障がい勉強をして専門家になるな」と言っています。一方で、「専門家になる必要はないが、知識は多くあった方がいい」とも言っています。そして実践が大切。僕たちが扱っているのは病気ではないから薬では治せないよ、そうではなくて場面づくりや環境づくりを通して、訓練、認識させることだよ、と話しているんです。—学生のレポートや論文の指導、評価するときに、どう斟酌すべきか迷うこともあります。

教育の原則は変わらないでしょう。たとえ専門的な論文指導の場合でも、働く学生に対してであれば、あなたの実践はとてもしりっぱでそれを論文にすればいいんだよということを伝えて、教員が持っている専門知識や人間性を伝えることを通して、いかに素晴らしい卒業論文や修士論文を書いてもらうことができるか。文章をうまく書けない人にも指導していかなくてはならない。手間がかかるのはあたり前なんです。実際、学生の能力や学ぶ理由も千差万別で学術的な知識だけを求めているわけではないから、教員は学生の興味や動機付けを行って、その人の隠れている才能や学修意欲を高めることが仕事ではないですか。また、博士課程には研究はしたいけど論文をたくさん書く時間がないとか、現場を大事にしたいという人も学んでいるはずですよ。研究する力より実践する力が大事だという場合も評価してあげないといけない。表現する方法は論文だけではないはず。普通の大学、修士や博士をつくる機関をめざすと、星槎の理念や思想からは離れていって星槎ではなくなってしまうのですよ。

インクルーシブ教育とギフテッド教育との関係

—少し先走るかもしれませんが、「ギフテッド教育」についてお聞きしてみたいです。星槎では今、スポーツで実践していると思うのですが、それ以外についてはどうお考えですか。

星槎国際高校には発達障がいや普通でないと言われる子どもたちが多くいて、そのなかに

はIQ150とか130あるがコミュニケーションがうまくできない子たちもいます。能力のあり方や差が大きいことを考慮して、高校では1クラスの25名を能力別や理解速度別に分けて対応しています。それを進めていくと「ギフテッド」、つまり特殊能力の生徒を集めた学校を作るという発想も出てきます。自然科学系ならば例えば、NASAやJAXAとのプログラムも入ってきて、20数年前にやろうとしたことが今ならできるかもしれない、そう、ロケットを打ち上げることもね。でも、今度は計画的にやらなくてはいけないな。個々の子どもの希望に合わせて、海、大気、宇宙といった分野を例えば「命」という一つの括りにして、そこからさらに各自が、深海、生物、惑星、宇宙の誕生、地球の成長と生き物の歩みというようにサテライトみたいに興味あるテーマに飛んでいけば、そこから人間のことまでつながる。人文科学系なら「人間学」からいろんなところに飛んでいって自然科学にもつながる。そうすると、そのギフテッドの子が救われて面白いことに時間を割ける。小学校から始めて飛び級にしたい、そんなことを考えています。星槎は大きな意味で縦横無尽に学べる場であつたら良いなと思っているんです。

——星槎大学には星槎高校からの進学者も増えてきましたし、高大連携で高校の授業をお手伝いすることもあります。そのなかで多様なタイプの子たちと出会い、教員としてそういう子たちと関わるための理解やスキルが必要だと感じています。また、他の学生たちも彼らを理解する機会を持てるので、インクルーシブ教育にも良いことではないかと思います。

僕自身に興味のあることばかりをやっていた子どもで、小中高の頃の興味の対象は考古学、動物、宇宙などでした。玉川大学の考古学の先生の発掘に連れて行ってもらい、門前の小僧みたいに覚えていった時期もあります。なるほど、だからこの地域のここに貝塚があつたんだなとわかってくると、すごく楽しい。学校の外、社会がずっと勉強の場でしたよ。64歳になってもまだ学びたくて、「スポーツを通じた発達障がい、不登校生の変容」を研究しようと早稲田大学大学院に在籍して、ゼミの人たちと喧々諤々やり、先生はとてよく指導してくれて、1年で修士論文を書いて修了しました。途中、先生の要望でテーマを変えたので「不登校、学習障がい、発達障がい生の教育的環境作りについての研究」—星槎グループの発展過程—という論文になったんです。

ギフテッドにもいろいろあつて僕自身は多動でアスペルガー、子どもの頃から興味あることを追求して「楽しい」経験をたくさんさせてもらえる環境があつたから助かってきました。それは、「かかわり合う人の力」のおかげなんです。僕は昔のかかわり合いのいいところを十分満喫したわけだけど、今の時代に昔ほどのことはできないにしても、人のかかわり合いを教育によって創っていく、そういうことを一番大切にしたいんです。ギフテッド、ギフテッドでない人に対しても、大学でのインクルーシブ教育はとても重要です。

「星槎はならず者でいいじゃないか」

——宮澤会長の年頭の挨拶のなかで私の印象に残った言葉に、「星槎はならず者でいいじゃないか」がありました。それで最近知った、アメリカの経営学者が提唱した「ダイナミック・ケイパビリティ（正しく変化する能力）」という言葉を連想したのですが、ダイナミックで

いようよということでしょうか。

社会に必要とするものを創って提供するには自分たちが変化しなければならない。スピードを上げることで自身に負荷をかける、何だかんだ言う前にやろう、ということです。僕が教育を通した社会改革をしたいと思い始めたのが27歳の頃。それから40数年、星槎の思想と実践は僕自身の生き方そのものでもあるんです。「社会的な必要性」という言い方は自分にとっての言い訳でもあるんだけど、本当に必要性があるわけです。今、社会で困っている人たちがいるのであれば、やってみるべきだと思う。できるところからやっていけばいいし、やっているうちに変化していく。ダイナミックというのは実行して興すことじゃないですか。その意味ではたしかに経営かもしれない、面白いね。時代の変化と環境が人をつくっていく、だから教育、伝え方も相手の状況に合わせて変えるのは当然でしょ。社会的に必要性があることを現場でやってきたことで結果的に学問が成り立つということを僕自身と星槎は証してきました。これからも実践の強みを持ち続けることが専門性にも役立っていくと思います。

他から見れば、僕は変なやつ、創った学校は変わった学校に違いないでしょうが、今では普通以上の学校として存在していると自負しています。また、卒業式で生徒代表がわれわれの目標や目指しているものについてこう言ってくれました。「宮澤は人生の暴走族、教育界のならず者」。そう表現してくれたことは最高の誇りだと今でも思っています。みなさんから見れば「何をド素人がほざいているんだ」と思われるかもしれませんが、相手や環境が困難な状況にあればそれをどのようにして乗り越えるか、工夫しながら前に進むことが大切だと思います。みなさんがよく「星槎らしさ」を口にしてくださっていますが、果たしてそれで良いのかも考えていただければうれしく、幸いに思います。

——ここまでに、星槎大学が創られたときの思想を忘れるな、それに則って本質的な教育の実践をしよう、ということを諄々とお話くださり、厳しい評価ですが受け止めて「実践」していかないといけないなと思います。長時間にわたり貴重なお時間をいただき、たいへんありがとうございました。

(インタビュー 2021年1月13日、1月28日、2月26日)